奈文研ニュース

No.86 Sep 2022

NABUNKEN NEWS

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

奈文研“2022メモリアル・イヤー”を迎える！

2022年は、奈文研とゆかりの遺跡にとって、記念すべき“メモリアル・イヤー”となりました。

まず、奈文研が奈良における文化財関係の国立研究機関として設置されてから70年が経ちました。そして、長年にわたり調査研究のフィールドとしてきた平城宮跡が、文化財保護法の前身である史蹟名勝天然紀念物保存法（1919年制定）のもとに史跡に指定されてから、ちょうど100年目を迎えました。さらには、平城宮跡とともに調査研究のフィールドとしてきた藤原宮跡の特別史跡指定、高松塚古墳の極彩色壁画発見から、ともに50年の歳月が経過したのです。今年は、これらの四つが重なる文字どおり「記念の年」となったといえましょう。

このことを受け、奈文研では、創立70周年を迎えるにあたり、11月後半の刊行に向けて記念誌の編集を進めているところです。また、奈文研創立70周年と平城宮跡史跡指定100周年を記念し、去る６月25日（土）には、なら100年会館大ホールにおいて、「平城宮跡の過去・現在・未来」と題する公開シンポジウムを開催しました。今秋、10月22日（土）には、東京・有楽町の朝日ホールにおいて、東京文化財研究所との共催のもとに、高松塚古墳壁画発見50年の記念講演会を開催することとしています。また、藤原宮跡資料室においても、模様替えに向けて準備を開始したところです。

“2022メモリアル・イヤー”の後半に向けて、引き続き私たち奈文研がお届けする企画にどうぞご期待ください。

（所長　本中 眞）

平城宮跡史跡指定100周年・奈文研創立70周年記念シンポジウムのパネルディスカッション

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第210次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなってきました。大極殿院の四周は桁行14尺、梁行10尺を基本寸法とする複廊構造の回廊がめぐり、大極殿院内部については、回廊に囲まれた広場（内庭）の中央に大極殿だけがそびえ立つ構造が長らく想定されてきました。しかし、2019年度に実施した第200次調査で大極殿の後方を区画する「大極殿後方回廊」を発見したことで、大極殿院がほぼ２：１の割合で南北の区画に分かれており、前期難波宮の内裏前殿区画に近い構造をもっていることがあきらかになりました。

前期難波宮を参考にすると、大極殿北方の区画には後殿とその付属施設の存在が想定されます。ところが、第205次・第208次調査の結果、区画内部で建物が造営された痕跡は確認できず、空間であったことが判明しました。いっぽうで、大極殿の北側で未知の基壇が発見され、その全容解明が新たな課題となりました。以上の経過を承けて、大極殿の西北に565㎡の調査区を設定し、2022年５月９日～８月26日にかけて、発掘調査を実施しました。

調査の結果、大極殿の北側に東西約50m、南北約16mの長大な基壇（「大極殿後方基壇」）が存在し、東西端で大極殿後方回廊と接続する構造があきらかになりました。大極殿後方基壇は後世の削平が激しく、礎石据付痕跡等、直接的な建物の痕跡は確認できませんでしたが、凝灰岩による基壇外装の痕跡を検出しています。さらに、大極殿後方基壇の周囲に多量の瓦が散乱していたことが第20次調査と第208次調査でわかっています。こうした周囲の状況から、凝灰岩切石の外装を備えた大極殿後方基壇の上に、瓦葺建物が存在していたと考えられます。建物の規模や構造に関する詳細な情報は得られていないものの、大極殿後方基壇は大極殿後方回廊の基壇より南北に約３mずつ張り出していることから、回廊より梁行の大きい東西棟の建物が想定できます。

大極殿後方基壇上に想定される建物の機能に関する手がかりは得られていませんが、基壇から復元される平面規模や大極殿との位置関係から、この建物は大極殿後殿であり、大極殿後方回廊は大極殿後殿と大極殿院回廊を接続する軒廊（こんろう）と理解できます。こうした建物配置は前期難波宮における内裏前殿と内裏後殿の建物配置とは微妙に異なり、奈良時代前半の平城宮の東区下層の正殿と後殿の建物配置に近いものでした。すなわち、藤原宮大極殿院は全体では前期難波宮に近い規模と構造をもついっぽうで、殿舎の配置では後の平城宮につながる要素を既に有していたのです。これは、古代日本の宮都構造の変遷を考える上で重要な成果といえます。

８月６日（土）には現地見学会を開催し、468名の方々に調査成果をご覧いただきました。当日は雨で足元の悪い中お越しくださり、ありがとうございました。現在、調査区は既に埋戻しを完了し、報告書作成に向けた整理作業を進めています。今後の奈文研の調査にも引き続きご期待ください。

（都城発掘調査部　道上 祥武）

調査区全景（北東から）

基壇外装の痕跡（二上山産出の凝灰岩片を含む）

一条条間路の調査（平城第647次）

今回は共同住宅の建設にともない、法華寺町において発掘調査をおこないました。平城宮跡の東のこのエリアは、藤原不比等邸跡に造営された法華寺や、海龍王寺等があり、平城京の調査では重要な地域の一つです。調査地は法華寺旧境内北部を東西方向に通る一条条間路と、その北側溝が想定される場所にあたります。東西５ｍ、南北14mの調査区を設定しました。

調査の結果、一条条間路やその北側溝を確認することができました。一条条間路北側溝は、溝の幅が約6.3m、検出面からの深さは約0.9mありました。埋土は５層に大きく分けられ、平安時代の緑釉陶器や土師器の羽釜が出土しました。都が平城京から遷った後も、溝は使われ続けたのでしょう。また北側溝内からは東西方向の２条の杭列も検出しました。溝の北岸付近で４本、溝の中央付近で３本打たれており、いずれも杭の直径は７cmほどです。取り上げた杭の全長は約１ｍでした。これは平城京の造営計画をあきらかにする上で、貴重なデータといえるでしょう。

しかし、発見はこれだけにとどまりませんでした。一条条間路北側溝の下で、平城京造営にあたって巨大な溝を埋め立てるための地盤固めの遺構を検出したのです。

溝は幅が南北11m以上、検出面からの深さは1.4m以上と、北側溝をはるかに上回る規模で、調査区の北へと続きます。古墳の周濠にも匹敵する規模の大きさです。溝の底部付近には特徴的な黒色の土が堆積していました。溝を埋め立てた積み土の最下層で、地盤固めの遺構とみられます。この土は有機物由来とみられ、２層に分かれます。上層では広葉樹とみられる葉を確認し、土師器や埴輪片・陶棺片等が出土しました。下層には大型の自然木が複数並べられていました。

この遺構は、奈文研の本庁舎建て替え工事の際に検出した、敷葉（しきば）・敷粗朶（しきそだ）工法と、植物の枝葉を用いる点で類似します。敷葉・敷粗朶工法とは積み土の下に植物の枝や葉を敷き詰め、土を滑りにくくしたり、土中の水を逃したりする技術です。これは軟弱地盤の埋め立てに用いられるものですから、調査地周辺も軟弱な土地だったのでしょう。

今回は、奈良時代の工事の規模の巨大さに驚かされた調査でした。このような大規模な地盤固めの工事の痕跡は、当時の土木技術の水準の高さを現在に伝えてくれます。　（都城発掘調査部　山崎 有生）

調査区全景（北から。中央の溝は一条条間路北側溝）

一条条間路下層の溝（北から）

平城宮跡を貫く東大溝
いまむかし

－奈良文化財研究所創立70周年・平城宮跡史跡指定100周年記念特別展展示品紹介－

平城宮の内裏・東区朝堂院と東方官衙地区の間に、南北に貫く大溝（内裏外郭東大溝（SD2700）通称：東大溝）があります。平城宮の主要な基幹排水路であったこの遺構は、昭和３年（1928）、水田所有者の溝辺文太郎が奈良県技師の岸熊吉に依頼し発掘されることになります。平城宮跡における記念すべき初めての発掘調査でした（左下写真）。その後、発足した奈良文化財研究所によってこの東大溝は現在に至るまで継続的に調査されることになります。

昭和、平成、令和と調査を積み重ねた中から、滅多にお目にかけない資料を、奈良文化財研究所創立70周年・平城宮跡史跡指定100周年を記念する特別展「のこった奇跡　のこした軌跡―未来につなぐ平城宮跡―」で出陳します。

昭和３年の調査での遺構検出状況
（溝辺文昭氏所蔵）

内裏に近いという地理的な要因からか、他のエリアでは滅多にみられない、正倉院宝物のような優雅な姿を思わせる資料が認められます。

六弁の花弁形飾鋲（かざりびょう）が残る黒漆の調度品部材、黒漆の太刀の柄頭（つかがしら）、刀装具、銅製の鈴、佐波理（さはり）鋺の破片等……。おなじみの木製の人形（ひとがた）もここでは、金属製の人形とともにみることができます。精巧に作られた立体の人面や鳥形の木製品等の一風変わった資料もあります。

年月をかけて調査が積み重ねられた記念碑的存在の東大溝。その出土品を通じて、過去から未来へとつづく平城宮跡のありように想いを馳せていただけるきっかけとなれば幸いです。

（企画調整部　廣瀬 智子）

東大溝出土の多種多様な出土品

一乗谷朝倉氏遺跡の保存と活用を目的とした連携研究

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、四つの特別名勝を含む庭園や寺院跡、復原された武家屋敷等はもちろん、季節ごとに変化する美しい景色も楽しめる、非常に多くの見どころと魅力を備えた遺跡です。さらに、今年10月１日には新たに福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館が開館する予定で、博物館内の一画で石敷遺構の露出展示が実施されます。遺跡の中には、既に半世紀以上にわたり屋外で露出展示されているものもあり、残念ながら庭園の一部の景石等では劣化の進行が認められます。そこで、奈良文化財研究所と福井県は一乗谷朝倉氏遺跡を保存・活用するための包括的な保存技術の確立を目的として連携研究の協定を結び、現在は、新しい博物館内において遺構を安定して展示する手法と、景石の劣化を抑制する手法の確立を目的とした研究を実施しています。

景石の劣化に関しては、劣化の様相やこれまでの気象観測結果から、凍結破砕によるものと考えました。すなわち、景石にはその生成過程で生じた細かなクラックが多数内包されていて、ここから浸透した水が冬季に凍結することで景石の破壊が生じるものです。そこで、この推論を確かめるため、もっとも冷え込む１月末に今年は調査をおこないました。幸い、当日は期待通りに冷え込んだため、明け方に景石を観察すると、クラックの内部で氷を確認することができました。また、クラック内部で測定した温度変化からも水が凍る様子が確認できました。ここでの調査検討の成果が一乗谷朝倉氏遺跡はもちろん、全国の遺跡の保存と活用に資するものとなれば幸いです。　（埋蔵文化財センター　脇谷 草一郎、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　藤井 佐由里）

早朝に実施した景石劣化状態調査

当麻寺巻柱（まきばしら）の総合調査

奈良文化財研究所では、2020年度から翌年度にかけて当麻寺が所蔵する巻柱の調査を実施しました。

当麻寺の巻柱とは、中世に当麻寺曼荼羅堂（本堂）の柱の外側に巻き付けてあった木材です。表面には当麻寺へ田畠を寄進することを取り決めた中世の文書等が残っており、当麻寺の歴史を考える上での重要な資料として扱われてきたものです。寺には２枚が現存しており、保管されてきました。

まず、巻柱の建築学的調査では、巻柱等に残存する取り付き痕跡等から、巻柱の銘文は当麻曼荼羅にもっとも近い柱に、参詣者に正対して記されていたことがあきらかになりました。

また、今回の銘文調査にあたってはひかり拓本技術も用いました。従来の碑文用のものを応用して、反射を利用した抽出や赤外線撮影との合成等、墨書用に改良したもので効果を検証しました。その結果、微細な凸形状が抽出できる等、摩滅した銘文に対しても一定度の効果を得ることができました。これによって文字の判読が進み、複数の銘文は目立つ場所から順番に記されていたことがわかりました。

くわえて、江戸時代に巻柱がどのような状況にあったのかということについても史料より検討しました。その結果、同時代の拓本集に現在は失われた３枚目の巻柱の拓本が採られていたことが確認でき、この時代には３枚の巻柱が念仏柱に取り付く形で保管されていたことが判明しました。

以上のように、文化財に残る微細な痕跡を読み解くことで当麻寺の歴史の一端をあきらかにすることができました。詳細な報告については『奈文研論叢』第３号に掲載しておりますので、そちらもご参照いただければ幸いです。　（文化遺産部　橘 悠太）

当麻寺巻柱調査の様子

記念シンポジウム「平城宮跡の過去・現在・未来」

６月25日、平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウム「平城宮跡の過去・現在・未来」をなら100年会館で開催しました。新型コロナウィルス感染症の感染拡大防止のため、事前申込制となりましたが、多くの方々にご来場いただきましたこと、御礼申し上げます。

本中所長のあいさつに始まり、奈文研OBでもある佐藤信東京大学名誉教授による基調講演「平城宮跡の調査研究・公開活用と奈良文化財研究所」が続きました。先生自身の奈文研時代の経験もふまえたお話が好評を博していました。

続いて、シンポジウムの報告にうつりました。内田和伸文化遺産部長「平城宮跡の史蹟指定」では、大正11年（1922）の平城宮跡の史蹟指定にいたるまでの経緯を歴史的背景も交えて丁寧に語るもので、わかりやすく聞き入ってしまったという声が多く寄せられていました。

神野恵都城発掘調査部平城地区考古第二研究室長「奈文研による発掘調査」は、発掘の歴史を写真とともに興味深く説明したもので、もっと聴きたい、お話が短く感じたとの感想が数多くありました。

最後の岩戸晶子企画調整部展示企画室長「平城宮跡の活用と未来」は、文化財の活用に関する内容で、話を聞いたことで色々な場所にある遺跡の活用について考えるきっかけになった、遺跡の活用に興味がわいたという意見が寄せられました。

シンポジウム最後のパネルディスカッションは、本中所長のコーディネートのもと、パネラーの佐藤名誉教授、神野・岩戸両室長、山下信一郎文化庁文化財第二課長、中村孝国交省国営飛鳥歴史公園事務所長、中村俊介朝日新聞編集委員にくわえ、会場から内田部長、武内正和奈良県文化・教育・くらし創造部理事が参加し、平城宮跡の保存と活用で奈文研が今後担うべき役割、未来への展望について議論しました。所員だけでなく、関係諸機関の皆さんと様々な視点でこうした課題を議論できたことは、奈文研としても貴重な経験となりました。

発掘調査だけでない奈文研の調査研究活動の一端とこれからの方向性を示すことができたのではないかと思っています。　（企画調整部　加藤 真二）

■ 記　録

シンポジウム

平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウム
「平城宮跡の過去・現在・未来」
６月25日（土）　328名

文化財担当者研修

○建造物保存活用計画策定課程
７月４日（月）～７月８日（金）　15名
○文化財デジタルアーカイブ課程
７月25日（月）～７月29日（金）
対面18名＋オンライン50名

現地見学会

○飛鳥藤原第210次調査（藤原宮大極殿院）
８月６日（土）　468名

飛鳥資料館　第13回写真コンテスト

「高松塚古墳」
７月15日（金）～９月11日（日）　2,912名

平城宮跡資料館　令和４年度　夏期企画展

「大地鳴動
―大地の知らせる危機と私たちの生活―」
７月16日（土）～８月28日（日）　4,106名

■ お知らせ

＜ボランティアガイドについて＞

年々強まる猛暑のため、熱中症等による体調不良が予想されることから、ボランティアガイドを７月から９月の期間は変動的に対応しました。９月は空調設備のある平城宮跡資料館、平城宮いざない館展示室４については午前・午後とも活動としましたが、それ以外の第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園は午前中のみの活動となりました。

基調講演中の佐藤信東京大学名誉教授

奈良文化財研究所70周年・高松塚古墳壁画発見50周年

飛鳥資料館 令和４年度 秋期特別展「飛鳥美人　高松塚古墳の魅力」

1972年３月、高松塚古墳壁画が発見されました。発見は社会的熱狂と飛鳥ブームを巻き起こし、壁画は国宝に、出土品は重要文化財として指定されました。女子群像は飛鳥美人として飛鳥を代表する文化財となり、寄附金付記念切手はいまもって歴代最多発行部数を誇っています。その後、紆余曲折を経て壁画・石室は解体され、現在は修理施設で保管・公開されています。

本展覧会では、日本中を魅了した高松塚古墳壁画と出土品の魅力にあらためて迫るとともに、奈良文化財研究所の取り組みを中心に近年の調査研究成果をわかりやすく紹介します。これまでの50年をふりかえり、国宝中の国宝ともいわれる高松塚古墳壁画と出土品を次の50年へとつなげる機会となれば幸いです。　（飛鳥資料館　石橋 茂登）

会　　期：令和４年10月21日（金）～12月18日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日　※11月３日（木・祝）は無料入館日
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561

奈良文化財研究所70周年・平城宮跡史跡指定100周年

平城宮跡資料館 令和４年度 秋期特別展「地下の正倉院展―平城木簡年代記〔クロニクル〕―」

1961年に平城宮跡の調査で第１号の木簡が出土して以降、出土木簡の蓄積は続き、現在では30万点を保管するまでになりました。特に平城宮・京跡出土木簡の実物を一般の方にみていただく機会として、2007年より「地下の正倉院展」を開催し、秋の風物詩として定着しています。

本年は平城宮跡が史跡に指定されて100周年、そして奈良文化財研究所創立70周年にあたります。本展では、60年以上に渡る平城宮・京跡での木簡出土の足跡をふりかえりつつ、各年代を代表する木簡たちをご覧いただき、奈文研の木簡研究の来し方についてもご紹介します。

（企画調整部　岩戸 晶子）

会　　期：令和４年10月15日（土）～11月13日（日）
　　　　＊木簡の保全のため会期中に展示替えをおこないます。
　　　　　前期：10月15日～10月30日、後期：11月１日～11月13日
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）　入館無料／休館日：月曜日
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

奈良文化財研究所70周年・平城宮跡史跡指定100周年

記念特別展「のこった奇跡　のこした軌跡―未来につなぐ平城宮跡―」

100年前、史跡に指定された平城宮跡は、その後大きくその姿を変えて現在に至ります。本展では戦後から現代までの平城宮跡にスポットを当てます。あまり紹介されたことのない第１次調査から最新の調査成果までをトピック的にご覧いただくとともに、その調査・研究を支えてきた文化財の専門家集団、奈良文化財研究所の活動もご紹介します。

奈文研を中心として始まった68年前の発掘調査を契機に、それまで未知だった1300年前の平城宮の姿が徐々にあきらかとなり、その調査成果をもとに史跡の指定範囲の拡大、遺跡の整備も進みました。近年では、国営歴史公園として様々な活用もはかられています。本展を通して、平城宮跡のために多くの人々が汗を流してきた軌跡もあわせて想いを馳せ、保護・整備されて私たちの目の前に広がる平城宮跡の奇跡をも味わってください。　（企画調整部　岩戸 晶子）

会　　期：令和４年10月29日（土）～12月11日（日）
場　　所：平城宮いざない館（平城宮跡歴史公園　朱雀門ひろば）
開館時間：10：00～18：00（入館は17：30まで）　入館無料／休館日：会期中は11月14日のみ
お問合せ：開館情報に関しては平城宮跡管理センター　☎0742-36-8780
　　　　　内容に関しては奈文研 連携推進課　☎0742-30-6753

編集　「奈文研ニュース」編集委員会　　**発行**　奈良文化財研究所　2022年９月発行
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp　Ｅメール：koho_nabunken@nich.go.jp